

# 外道侍時代劇

## 報いの金責め

女だけの村から娘を浚おうとした外道侍、  
女房連中に見つかって

文字通りの袋叩きに！



玉子王子 著

## 1章 チンピラたちに女同心がキ〇タマ潰し

道行く人々は皆着物。

男が荷車を押し、後ろを子供がついていく。

左右に俵を積んだ馬を引いた女と、護衛らしい刀を持った男が歩いていく。

ちゃんと働いている人々。

それを見下ろす若い男の左右には華やかな着物の女。

その後ろに、一際美人が立つ。

「一刀齋さん、昨日の分のお支払いがまだですよ」

「ああ、うっかりしておったわ」

すらっとした美人。

二階建ての娼館の主である。

二階から外の街道を見つつ、外道侍こと八幡一刀齋は青ざめていた。

——このババア、金がなくなるタイミングでしっかり請求に来るからな。

かといって、完全にゼロになった段階ではこない。

常に一日飲ませ、その最低限のツケを首輪のようにつけて外に放り出す。

「皆、金ある？」

仲間のチンピラ。

と言っても、別に親しくも無い。

名前もろくに覚えていないが、その方がお互いいいのだ。

万が一のとき、お互いの素性がばれない。

寝ぐらにしているこの宿に帰らなければ、お互い接点は途切れる。

しばらくほとぼりを冷ませば、問題ない。

多少腕が立っても、一刀齋もチンピラでしかない、そんなに延々さがされるような大きな悪行をやる器量はないのだ。

男たちが、頭を振る。

ニコニコと横に座っていた女たちが立ち上がる。

金がないならもちろん用はないのだ。

女将が虫けらに対するように微笑む。

「それじゃ、お金稼いだらまた、ツケ払いに来てくださいね」

肩をすくめる一刀齋。

黒い、**学生服のような着物**を着ている。

江戸時代の日本のような世界だが、実際にはそれっぽいファンタジー世界である。

美女に近付き、頬を緩める。

「後で金は払うから、もうしばらくいさせてくれないか？ なんなら、体でお礼をしてもいい」  
音もなく、女の尻に手をやる。

「あら」

ポッ、と顔を赤らめる女。

そうしつつ、ゴチャッと派手な音を立てて膝を一刀斎の股座に減り込ませる。

男の急所、二つの肉玉が女の華奢な膝に無惨に押し潰される。

「はぐああああああっ！」

ゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリ、と肉玉を膝で磨り潰しつつ、頬を赤らめたままの女。

「ただでそういうことしたらキ〇タマ潰すっていませんでした？」

「おおおおおおおおおおお！ や、やめ……マジでキ〇タマ潰れる……」

「ううふ、キ〇タマ潰れる。キ〇タマ潰れる。……大丈夫。霊薬がありますから」

神官や僧侶や、その他法力身につけた人間や、妖怪が作り上げたさまざまな薬。

そういうものがその辺の店で売っている世界だった。

膝蹴り去勢を続けつつ、女将が懐から丸薬を取り出してみせる。

「この薬を飲めば、十秒ほどでキ〇タマぐらい再生するという都合がいい設定。ですから、この世界での去勢は一時的なことというファッション去勢設定になっております」

——何言ってんだこいつは！？

突然の膝金蹴りはまだ自衛といえるが、今の発言は正気を疑うしかなかった。

とはいえ、薬の効果は本当である。

だからこそ、女は手加減などしていない。

そのままいけば、本当に一刀斎の肉玉を磨り潰しかねない。

爪先立ちで、下がることも出来ず、ただ**男だけに棒立ち**という悲惨な状態の一刀斎。

あわてて、仲間のチンピラが慌てふためき、声をあげる。

「わかった、女将！ 出て行くから！ 一刀斎を放してやってくれ！」

「あら、さすが男前……」

「太助さまはおチ〇ポもご立派なんですよ女将」

「あらあ。さすが巨根男性は人物まで大きい……まあ、マラが超巨大でも人物が小さい方も……おっとと」

「……」

一刀斎の男のものは一尺（約三十センチ）の巨根である。

だから女将の発言はどう考えても一刀斎への当てこすりでしかないが、それを追及してさらにゴリゴリが続くのは男としての未来を閉ざしかねない。

いや、まあ潰れても薬で治るのだが、だから潰されても平気という男は一人もいないだろう。

一方で、一部の女たちは「治るのだから潰してもいい」という考えに流れる。

恐ろしい世界といえた。

道行く人々の中に、一刀斎たちがいた。

「はんぐううう、お、女将の野郎……いつか犯す」

仲間五人の先頭を歩きつつ、フラフラする一刀斎。

「やめとけ。あの女、元クノイチだとか」

「ならもっと気軽にやらせてくれてもいいだろ?! クノイチなら女の技も習ってるはずだし……」

言いつつ、チラッと後ろを見る。

女将に聞かれていたら、また膝金を食らいそうな気がする。

が、もちろんいない。

「で、どうする皆?」

「楽に手っ取り早く金欲しいな」

「じゃあやっぱ悪いことするしかないな」

しかし、特に何かあてがあるわけではない。

橋を渡っていると、瓦版売りが箱の上で叫んでいる。

「人形屋某の召使! 担いでいた袋の中身はなんと二百両!」

紙の束を叩く。

それが瓦版で、一枚幾らという話し。

瓦版の内容のさわりを説明し、面白そうなら買ってくれという体験版を配るようなやり方というわけだ。

「一両は十万円として、二百両は二千万円だ! その召使が突き飛ばされて袋が奪われた! これは大変だ! さあ、細かい話はこの瓦版に……」

「なんかあいつわけのわからないこと言わなかったか?」

「さあ……」

チンピラたちを顔を見合わせる。

「瓦版は一枚二十文! 一文十円と考えれば二百円だ、さあ買った買った!」

そう言われても、新聞など買うチンピラたちではない。

一刀斎も興味がないので通り過ぎる。

「円ってなんなんだよ……」

釈然としない物を抱える一刀斎の後ろでチンピラたちが話し合う。

「二百両も召使が袋に入れて運んでるなんて……」

「上手くそういうの見つけて強盗できれば、六人だから一人三百万円以上か……」

「だから円ってなんなんだ! ?」

振り返っても、チンピラたちの返事は曖昧だった。

と、路地裏に差し掛かる。

まだ十代半ばぐらいの娘が袋を担いで歩いている。

結構重そうだ。

「おい、あれ、一刀斎」

「ああ、ちょっと狙っていくか」

まさか二百両は知っているとも思わないが、見たところ何処かの商家で働いている娘っぽい。

職人や、近くの農村の村娘が街にたまたまやってきたという感じではない。

なら、何か持っているのではないか。

「お嬢さん、ちょっといい？」

「え？ おじさんたち誰？」

「でへへ、実はその袋を貰いたいんだ」

「そして、お嬢ちゃんの体もね！ 処女かな？ でへへへ、おじさんのおチ○ポ大きいよ！」

根っからのクズっぷりを見せるチンピラたち。

おじさんと呼ばれたが、まだ二十代の前半の者たちだ。

だが、そんな細かいことは気にする様子はなかった。

「さあ、とっととさらっちまおう！」

「そして金と体！」

「デカチ○ポでズコバコ！」

自分を正当化するとか、そういう余計なことは言わない男たち。

青ざめ、震える娘。

「ひ、た、助け……」

「げへへ、誰も来ないよ！」

そう、人通りが少ない道だ。

が、不運か天罰か、人がやってくる。

「こら、お前ら何をしてる！」

ザザザ、と音を立てて、一刀斎たちの後ろに誰かが広がる。

見ると、二十人ほどの女たちだ。

皆、侍の格好。手に手に捕り物用の棘付き二股棒などを持っていた。

街の治安維持を担当する同心などだ。

女の侍など珍しくも無い世界である。

「お前ら、物取りか！ 武器を捨てろ！」

「そういわれて、捨てるわけねえよな」

チンピラたちが何か丸薬のようなものを口に入れながら、次々刀を抜く。

一刀斎も、素早く抜刀した。

突き出される二股棒。

かわして踏み込み、女の首筋を切りつける。

血が一瞬噴き出すが、すぐに止まる。

飲むと一日の間どんな怪我でも瞬時に治ってしまう「自衛丸」と呼ばれる霊薬を飲んでいるようだ。

というか、戦いの場でそれを飲んでいないものの方が珍しい。

傷はすぐふさがるが、血が一気に抜けたことで卒倒する女。

ドサ、っと地面に叩きつけられ、パッと目を開ける。

その喉を足刀で踏みつける一刀斎。

「ぐえっ！」

一瞬目を向いて、ガックリと意識を失う女。

自衛丸を飲んだ相手を殺すことは出来ないが、気絶させることは可能だ。

というか、だからこそあっさり首筋に切りつけることも出来た。

もし相手が死ぬなら、この状況でそんな事は難しい。

殺すほどの理由はない。

と、女同心たちが激昂する。

「あ、やったわね！」

「女を踏みつけるとか、それでも男!？」

「あいつやるわよ！」

「皆でかかりましょう！」

「押さえ込んでキ〇タマ潰しよ！」

「どうせあいつも自衛丸飲んでるから何度もタマタマ潰してやりましょう！」

青ざめる一刀斎。

彼もちろん、刀を抜くときに自衛丸は飲んでいる。

だから、どんな怪我をしても平気である。

そして、女たちがいっているように、玉を潰されてもすぐ治る。しかし押さえ込まれては、相手がその気ならまた潰されるだろう。何度も何度も。

——おいおい、何だこの女ども、キ〇タマ何度も潰してやるって……明らかにヤベエだろ。

周りを囲まれ始める。

その間に、チンピラたちは必死で刀を振り回す。

振り回すが、あまり上手く行っていない。

服の袖に二股棒の棘を引っ掛けられ、棒を引かれてつんのめる男。

別の女が棒の石突、二股棒が付いているのとは反対側の端で足を払う。

「おわっ！」

腕を前に引っ張られているので、顔からこける。

と、その男に二三人の女同心が群がる。

「今よ！」

「ちょ、おぐっ！」

「キ〇タマ蹴って！」

「キ〇タマ蹴り潰すのよ！ 傷はすぐ治っても、男はキ〇タマ潰されたら痛みで動きが凄い鈍るから！」

「ちょ、やめ、あぐっ！ やめて！ 降伏する！ はぐっ！」

腕を前に引っ張られて、二股棒で押さえられ、うつぶせのチンピラ。

足を一人の女が両脇に抱え、体を仰け反らせつつボスボスと股間を蹴りつける。

防御の仕様が無い。

まあその形なら中々玉が潰れるものではないが、だからこそだろうか、女同心にまったく手加減の様子はなかった。

「そらそらっ！ キ〇タマキ〇タマ！ 次は潰れるかもね！」

「やめてえええええ！ はぐあっ！」

「自衛丸飲んでるなら平気平気！」

「いやだあああああああ！ キ〇タマ潰されたくない……おぐっ！」

腕が立つわけではないチンピラたちは、次々女同心に押さえ込まれていく。

「はぐああああああああっ！」

「はぐああああああああっ！」  
「ぎゃはははは！ この体勢になったら、

もう **キ〇タマ潰し放題ね！**」



一人が羽交い絞め、一人が電気あんま。  
まさに

**男殺しの体勢**

で  
グチャグチャと股間を踏みにじる女同心。  
寄ってたかって肉玉を潰されていく男たち。

「ぎゃはははは！ この体勢になったら、もうキ〇タマ潰し放題ね！」

一人が羽交い絞め、一人が電気あんま。

まさに男殺しの体勢でグチャグチャと股間を踏みにじる女同心。

寄ってたかって肉玉を潰されていく男たち。

かと思うと、一対一でやられるものもいる。

「釣鐘！」

「おあああああああああっ！」

ゴチャ、と股間に掌底を入れる女同心。

上から無造作に振り下ろされる刀を二股棒で受け、体勢を低くして滑り込んで手を叩き込んだ。

そして、その中を握り締める。

女の柔らかい手の中の、男の命の玉を。

音が出るほど、ギュウウウウウウウ、と力いっぱい握り締める女同心。

「ちょ、やめ……あああああああああああああああ！」

「キ〇タマ潰れろ、キ〇タマ潰れろ！」

男を制圧する一番効率のいい方法を容赦なく実行していく女同心たち。

「いいぞ！」

「やっちゃえ！」

「悪党はキ〇タマ潰し一択！」

「金潰し！ 金潰し！」

女同心とチンピラの争いの周りには、早くも人垣が出来ていた。

人通りが少ないから、騒ぎを聞きつけた人々は遠慮なく詰まって見物も出来る。

女が男の急所を潰しまくる展開になりそうだからか、男の見物人はいない、女ばかりだった。

目を血走らせ、歓声を上げている。

それに答えつつ、金潰しを続ける同心たち。

アウェーの中、震えるしかない一刀斎。

「うわ、やべ、やべ……」

もうだめだ、と一刀斎は諦める。

といっても、それは勝つのを諦めるということだった。

というわけで、逃げる。

元々利害以前に、ただなんとなく一緒にいた仲間たちである、こうなれば見捨てる。

というか、そもそも「仲間」だったのかは微妙なのだ。

本当に一緒にいただけの間柄で。

周りから突き出される二股棒を素早くよけ、刀で払う。

先のほうは鉄で補強され、中々切れない。

一様「達人」の末席の一刀斎は切ろうと思えば鉄でも切れる。

しかしそうしようと集中すれば、切る一本以外をよけきれないだろう。

服にかすれば、引っ掛けられて押さえ込まれない。

そうなれば、もちろん次々女同心に飛びつかれて身動き取れなくされ、男の命を握り潰されるに違いない。

強いところを見せてしまったので、多分念入りに何度も潰されまくる。

考えただけで、ふんどしの中の並外れた巨柱が縮んで、普通の巨根ぐらいになりそうになる、が、縮まない。自衛丸を飲むと、なぜか男性器が萎縮することがなくなる。安心な状態だと誤認するのだろうか。

刀を振り回し、隙を探す。

あらぬ方向に踏み込む振りをして、均等に包囲されないようにする。

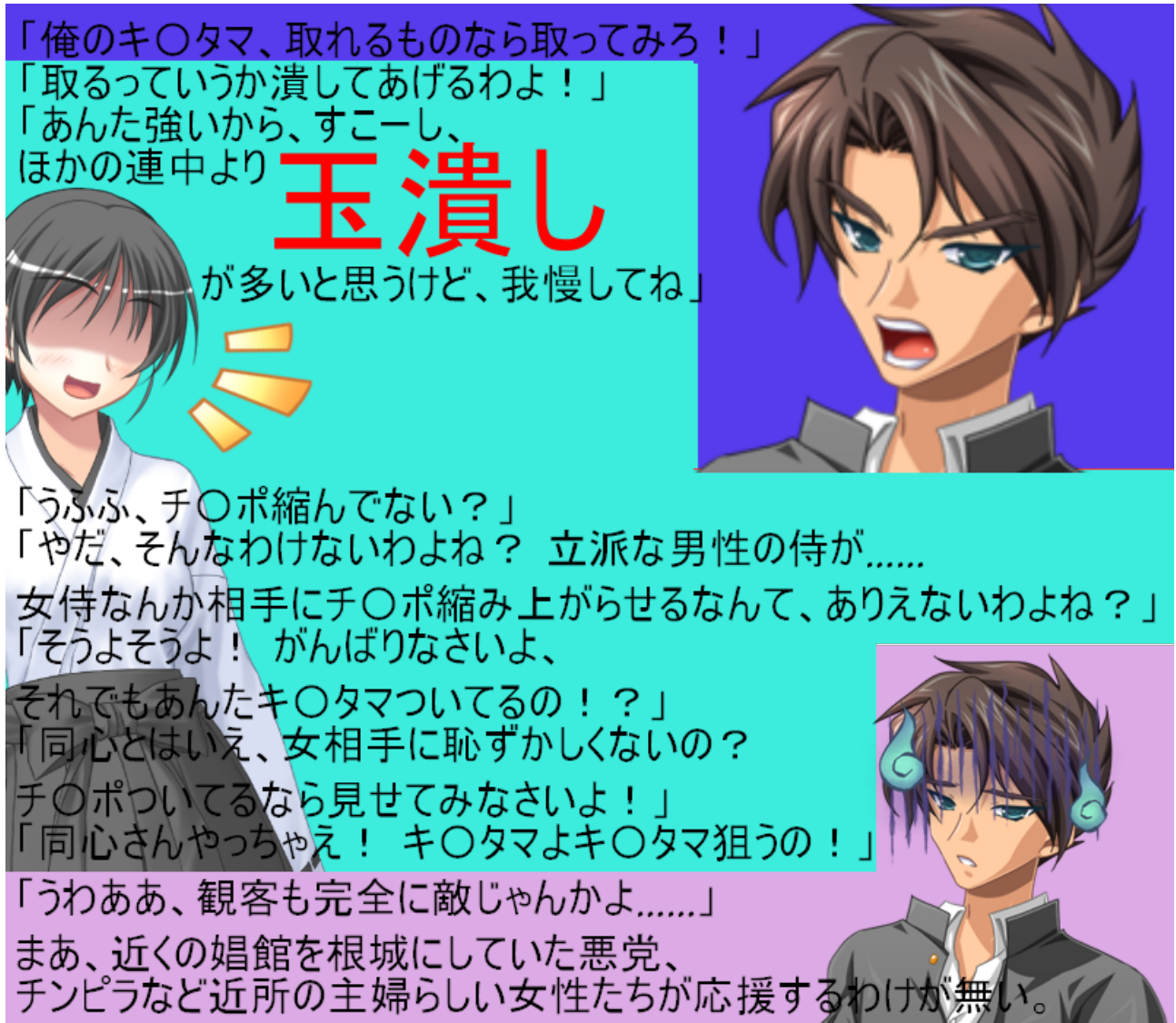
チンピラの玉潰しに人員を取られ、周りにはいるのは十人程度である。

なんとかなる。

女同心たちはしっかり訓練されていて、それなりに強いが、達人ではない。



「俺のキ○タマ、取れるものなら取ってみろ！」



「俺のキ○タマ、取れるものなら取ってみろ！」  
「取るっていか潰してあげるわよ！」  
「あんた強いから、すこーし、ほかの連中より **玉潰し**が多いと思うけど、我慢してね」

「うふふ、チ○ポ縮んでない？」  
「やだ、そんなわけないわよね？ 立派な男性の侍が……女侍なんか相手にチ○ポ縮み上がらせるなんて、ありえないわよね？」  
「そうよそうよ！ がんばりなさいよ、それでもあんたキ○タマついてるの！？」  
「同心とはいえ、女相手に恥ずかしくないの？ チ○ポついてるなら見せてみなさいよ！」  
「同心さんやっちゃえ！ キ○タマよキ○タマ狙うの！」

「うわああ、観客も完全に敵じゃんかよ……」  
まあ、近くの娼館を根城にしていた悪党、チンピラなど近所の主婦らしい女性たちが応援するわけが無い。

「取るっていか潰してあげるわよ！」

「あんた強いから、すこーし、ほかの連中より玉潰しが多いと思うけど、我慢してね」

「うふふ、チ○ポ縮んでない？」

「やだ、そんなわけないわよね？ 立派な男性の侍が……女侍なんか相手にチ○ポ縮み上がらせるなんて、ありえないわよね？」

「っていか、自衛丸飲んでたらチ○ポもキ○タマも縮まないみたいだけどね」

「気合の問題として……まさか男性様が、女相手に縮んでないわよね？」

「そうよそうよ！ がんばりなさいよ、それでもあんたキ○タマついてるの！？」

「同心とはいえ、女相手に恥ずかしくないの？ チ○ポついてるなら見せてみなさいよ！」

「同心さんやっちゃえ！ キ○タマよキ○タマ狙うの！」

「うわああ、観客も完全に敵じゃんかよ……」

まあ、近くの娼館を根城にしていた悪党、チンピラなど近所の主婦らしい女性たちが応援するわけが無い。

それでも、ごく一般の女性が自分の急所が粉碎されることを心底望み、声をあげているのを見ると

引くしかない。

というか、縮み上がるしかない。玉も竿も物体としては縮まないが、心の持ちようとして、縮み上がる。

と、隙。

同心の輪に隙が出来た。

「うおおお！」

反対側に走ると見せかけ、抜重で隙のある方向に飛ぶ。

「あっ！」

抜ける。

同心たちの間を。

「どけどけ！」

「きゃああ！」

「キ○ガイよ！ 逃げて！」

唾を飛ばし、刀を振り回していればすぐに主婦たちは道を開ける。

自衛丸を飲んでおらずとも、事後に傷を治す霊薬もある。

同心たちは当然それを大量に持っていて、主婦たちが仮に首を切られようとそれで簡単に治すだろう。

だが、治るからと行って切られていいと思う主婦などいなかった。

……しかし、男性器は治るのだから破壊してもいい、と彼女らは心底思っている。

都合がいい考え方といえるだろう。

「待てこら！」

「キ○タマ潰してやるからちょっと待ちなさいよ！」

「皆でグッチャグチャにしてあげる！」

「それで誰が待つよ！？」

叫びつつ走る。

後ろを、女同心たちが追ってくる。

体験版終わり

この後一刀斎の悪行と報いの金潰しの連鎖が続き、  
行き倒れて助けられた村の娘を浚おうとして女房連中に見つかり、  
再生するのをいい事に死ぬほどキ○タマ潰しを食らいます。  
潰れて安心ファッション去勢、だからこそ潰され続けるファッション去勢。  
一定時間一瞬で再生し続けるので待ち時間無しの玉潰しが可能。

続きは製品版でお楽しみください